左／『ピエロ』。第98回（2013年）二科展出品作。2011年の津波や震災を思って描きました
右／2013年に開催した二人展の会場にて。OBも来場しました

りました。今は２人展になりましたが、１年ごとに続けています。2007年からは二科展にも応募し始めて100号の大きな作品を描くようになりました。最近は人物を半分抽象でアレンジする形で描いています。この『ピエロ』もそうです。被災地に対して何も力になれていない自分を反省しつつ、優しいメロディーを奏でるピエロをテーマにしました。絵画にも何か人の力になれることがないかと模索しています。

もともと音楽が好きで、楽器の形やメロディー、リズムなどの音楽のイメージを絵画に表現しようとしています。特にジャズの自由な表現に魅せられているので、演奏者の動きや軽快さを表現できたらと。コンサートで演奏している人を見たときの印象や、写真に撮ったものをモチーフに頭の中で構図を組み立てるのですが、描くのは苦心しています。

｜適正な請求が権利へとつながる｜

――意匠登録が円滑になされるために審判の請求人に望まれることはありますか。

齋藤◎審判を請求するからには拒絶された本願意匠と拒絶理由の引用意匠とを比較して、本願意匠のどこに特徴があるのか、特に意匠的、デザイン的な特徴がどこであるのかをうまくポイントを絞って請求して頂けるとありがたいです。請求される方は代理人を通すことが多いかと思いますが、通り一遍ではなく、デザインが機能と結びついてどういう効果があるのか、そして、デザイン面で今までにない新しくて変わっているところはどこかなど、主張したいポイントを明確に説明して頂けたらなと思います。例えば、商品化にあたって、その分野では従来技術はなくて、新技術と結びついてこういうデザインができた、そういう形にするのに工夫が必要だった、というようなことをうまく説明して頂けると、これが意匠として新しい特徴なのだというのが審判官も理解しやすくなりますので。

また、無効審判の場合は、証拠として使うのに大事なのはやはり公知になった日付です。ただ、雑誌等を提出して頂いても、何月何日付けの雑誌の何月号という発行日と、実際に売りに出された日が分からないようなものだと公知の資料の証拠として使えません。そこにも注意して頂ければ、早く適正な結果をお出しできると思いますので、どうかご協力ください。

――本日はありがとうございました。

インタビュー：編集担当

諸外国のデザイン事情

ガラパゴスデザイナー中国に渡る Ⅳ
―― 中国企業とのデザイン開発

株式会社賀風デザイン 代表　古賀治風

前号のあらすじ

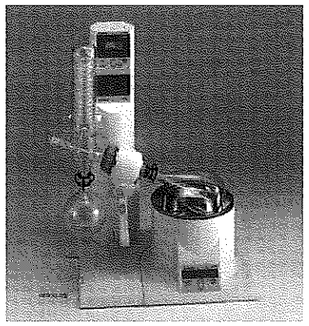
中国の異質な商慣習を独自の方法で克服した頃、「中国とは何か」という漠然とした調査依頼が日本から舞い込んできた。これを絶好の機会と捉え、8000キロにわたって中国主要都市を巡り、歴史、風土、政治、教育などもあわせて学習することとなった。ここまでの様々な経験と知識が相まって日本人と中国人の違いを自分自身に深く考えさせることになった。来年は還暦という頃であった。

1．工業デザイン分野とは何か

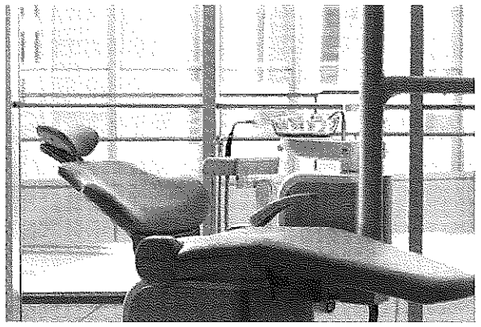
工業デザインとは 製品の機構、レイアウト、安全性、メンテナンス、法規、スケジュールなどの厳密な開発条件を理解した後、与えられたわずかの日数（期間ではない）で造形を行い、その後、少なくとも半年、長い場合は３年もの間、製品化のためのアフターフォローが待っている。そんな産業界の黒子のような仕事だと言うことをほとんどの人は知らない。デザインが華やかな仕事だと思われるのは構わないし憧れるのもいい。しかし工業デザインについてはその範疇に全く当てはまらないだけでなく異業界といえるほど遠い存在だ。我々はその工業デザインの中でも医療、実験、分析、農林などの専門機器に限定したデザイン会社である。第４回目の本稿では我々が中国における混迷の時代を脱し、開発業務が順調に推移し始めた頃からの開発エピソードをいくつか紹介しよう。

2．千客万来事件

あるとき立て続けに幾つものエンジン発電機の会社から仕事が舞い込んできた。我々はこういう分野で多くの実績があり、日本でもデザイン賞を頂いてきた。それがホームページに掲載してある。それを見た企業がたまたま重なっての依頼になったのだろうと思った。しかしそこにはもっと深刻な理由があった。彼等を慌てさせたのは米国での裁判結果からだった。バイクでも有名な日本の汎用エンジンメーカーが発電機の類似デザインで中国メーカーを訴え



科学実験機器



歯科医療機器

発電機

それに勝訴、莫大な賠償が中国企業に課されたのだ。

面子をつぶされた格好の中国政府は早速、同業界にコピー商品は今後一切許さないと通告、これを言い渡された企業は一斉にオリジナルデザイン開発に奔走し始めたというのが真相だった。

風が吹けば桶屋が……どころではない。合計５社ほどの会社からいきなりの仕事依頼で我々には超追い風だ。ひとつの会社幹部に聞いたところ、この手の製品はほとんどコピーで成り立っているらしい。現在、中国には農林機器の会社は300社ほどで以前は700社もあったとのこと。それを聞いて、これは大変なことになると思ったがフタをあければ それほどでもなく、引き合いは潮が引くように少なくなっていった。

理由は簡単だ。これまでは評判のいい発電機を街中の測定会社でデジタルコピーを行い このデータをもって安い金型メーカーに発注し外装パーツを量産する。そしてエンジン（これもコピー）を業者から購入して組み立てればあっという間に数百人規模のメーカーになって高級車を乗り回すことができたのだ。これからは今まで出会ったこともないデザイナーに仕事を頼み、高給で技術者を雇い、長い時間をかけて開発し、完成に至っても今度は様々な機器を購入し耐久テストなどをしなければならない。すなわち割りがあわない。まともな開発がこんなにも大変だということを知ったとたん尻込みするのだ。

３．エンジン発電機の開発

しかしこの中でも勇猛にその面倒な道を歩み出す会社もある。そんな１社と開発が始まった。この会社の２代目社長はまだ若く20代だ。中国にはこういう若者社長が珍しくない。若さ溢れるだけでなく見るからに根性のある表情をして頼もしい。我々の提案の最後に「賀風さんはどれがいい？」と聞いてくる。「この案がいいのでは」というと「いや俺もそう思った。これにしよう」と即決する。こういうトップ同調型の即決は、かつて日本ではよく見られたパターンだが最近はほとんど「持ち越し責任回避型」になってしまった。

エンジン・デジタル発電機

とにかく中国企業はトップデシジョンですべて決まる。プレゼンに社長が遅れてやってくる間は「ここがいい、あそこが悪い」とチームメンバーは勝手に言いまくるが社長が来たら沈黙と化す。そして社長の一挙手一投足に同調する。これは今でも日本でよく見かけるシーンだろう。彼らを無視した社長はざっと全体に目を通した後、我々の意見を求め、深くうなづき、最終案はシナリオの先に落ち着いていく。まさに理想的なパターンだ。心地よく爽やかでさえある。異国の地にかつて味わった祖国の古き良き時代がよみがえる。

ところで 今回決定したデザイン案にはそれまで常識だった１本ハンドルが左右２本となっているのが極めて特徴的だ。これは重量物を２人で運ぶための構成で高齢者への配慮もある。パーツ数やコストなどから日本ではまず選択されることはないデザインだ。カラーも中国では珍しくグレーに決まった。

この製品が量産化されてまもなくエクセレントなニュースが飛び込んできた。米国の大手農林機器ディーラーとの大量契約を獲得ができたとのことであった。中国で我々と共に歩んでもらえる顧客がこうしてまた１社増えることとなった。

４．日本に開発センターを作りたい。

もう１社に提案したデザインは金型完成まで行ったのだが排気ガス規制の問題をクリヤーできず対米輸出を断念することになった。社長いわく高度なエンジニアリングは中国人では難しい、この先を考えると日本で開発センターを作るべきだと思う。賀風さんに当てはないかと聞いてきた。日本に帰った時に動いて欲しいという。

そういえば日本の農林機器メーカーはどこもジリ貧でどんどん縮小している。経験豊かな技術者たちは何をしているのだろう。後日、日本に戻ったとき、かつて農林機器メーカーの開発室長だった方を食事にお誘いして話しをすることとなった。生粋のエンジニア出身の方なのだ。きっと嫌な顔をされて拒絶されるのだろう。少し緊張してこの話を切り出してみた。しかし答えは意外にも「そういう時代なんだろうな」とポツンと一言。知っている部下たちが次々とリストラされていくのを大勢見てきた方だ。「自分にできることがあれば協力しましょう」という約束を取り付けて食事は終わり、見ようによっては人の弱みに付け込む悪徳ブローカーのようなこの役回りからも解放された。自分はいいことをしているのかそれとも……。

たしかに中国人は物事を刹那で追いかける。中国人の大半は未来を信じてはいない。身を粉にして不夜城のように働く日本人開発者たちとは全く違う。未来に起こる故障や耐久性を真剣に心配するのが開発だ。開発とは未来と自分以外への約束や義務の遂行といってもいい。中国人に他人への約束や義務の履行を期待することは ここまでの経験に照らし合わせると確かに難しいと言わざろう得ない。

そういえばと自問自答する。自分以外のために必死に遠い未来への約束を果たそうとする開発者の精神性とは一体何なのだろう。日本の設計者は身に降りかかる大問題のように誰も気づかない小さな部品一つの選択にいつまでも真剣に悩み込んだりするのだ。完成すれば特別ボーナスが出るということでもない。ただ、その製品は自分の手を離れたあと、何事も無かったようにその役割を果たし続けていくだけだ。

こうして、これまで常識と思っていたことをあらためて考えたりするが異国効果なのだろう。 また自分は中国で日本のことを考えている。

５．血液分析装置の開発

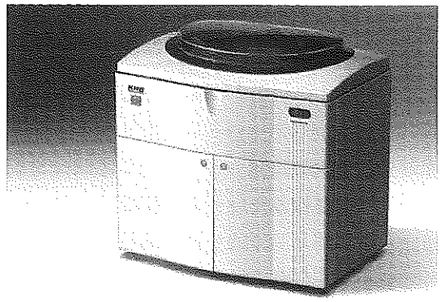
血液分析装置を作りたいという依頼だった。血液分析用試薬の専門メーカーであり訪ねてみれば規模はけっして小さくはない。試薬を購入してもらうためにハードを抱き合わせて販売する戦略とのこと。どうやら試薬ビジネスは相当に魅力的なものらしい。この会社の問題はいつものようにモノつくりの経験がほとんど無いことだ。

エンジニアの有無を聞くとチームは一応できあがっているらしい。引き受けるべきか否かを相当に迷うが我々にとって初めてのジャンルでありデザイン要素がぎっしりと詰まった大型の精密医療機器はデザイナーの心を強く誘う。この機器の有力な競合メーカーに日本企業が多いということも挑戦心をかきたてる。よし、日系企業が脅威に感じるようなデザインを作り出してみよう。

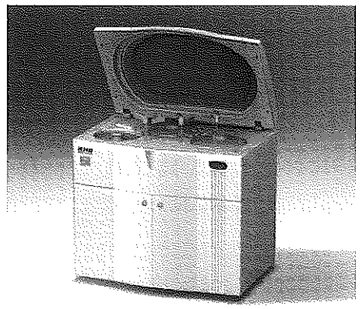
結果として引き受けることとなったのだが事前の心配通り開発は困難を極めることとなった。生産数が少なく精度を要求する大型外装部品は材料や製法が限定される。このことで確かな技術を持つ量産工場は中国には少ない。これを探し回って依頼に至るまで数カ月を要してしまった。そして内部の機構設計はなかなか決まらず位置やサイズが刻々と変わる。これが決まらないとデザインにも手がつけられない。結局、遅れに遅れて生産開始まで２年半もかかってしまった。よく途中で投げ出さなかったものだと我ながら思った。しかしそれは相手方にも言える。ここの社長はよほど医療機器のような面倒くさい開発に向いた「正しくしつこい性格」なのだと徐々にわかってくるのだった。

とにかく製品はほぼイメージどおりに仕上がりデザインの独自性と完成度は業界の水準を超えたと確信した。試薬しか作ってこなかったメーカーが初めて本格的な血液分析機器を発売するのだ。少し不安であったがそれはすべて杞憂に終わった。

発表された製品は機能も性能もそしてデザインも大好評で引き合いも順調とのことであった。



血液分析装置



無錫工業デザイン博覧会
企画賞のトロフィーと楯

後日、無錫の工業デザイン博覧会に出品したところデザイン企画賞というものも頂くことができた。社長はもちろん、担当者たちが喜んだのはいうまでもない。

しかし発売後まもなく問題が起こった。コピーが現れたのだ。良い製品の宿命としてみれば仕方がないが、中国のオリジナル製品を中国人がコピーするのはあまり聞いたことが無い。会社にとっても当然迷惑だし、それを聞いた自分も一応眉をしかめてはみるのだが、こういう場合、作者の心境はまんざらでもないということを告白しておこう。とにかく、この成功によって我々はその後、イメージを統一したシリーズのデザインをすべて受託することとなった。

6．トップの強力な指導力

とにかくここの社長の粘りと根性そして指導力は素晴らしい。我々に絶対的な信頼を寄せてくれただけでなく内部のエンジニアチームも一人として欠けることなく開発が進行したのは奇跡的だった。

なぜならば、中国ではプロジェクトの途中でメンバーが必ず欠けていき、開発に致命的な支障をきたすことが多々ある。我々もそれに遭遇して開発が立ち行かなくなったことも一度や二度ではない。中国人の定着率は日本とは比べ物にならないほどに悪い。

正直言えば自分でもこのような人々を仲間として製品開発を始める気にはならない。しかし この会社の定着率は違った。このことを社長に問いかけると「それは簡単だ、成功報酬を約束することだ」という。

一体どうやって？　その秘訣を後日 我々は現実として見せられることとなった。この会社は１年後、香港マーケットに上場を果たしたのだ。そして約束のストックオプションは開発メンバー全員の笑顔になった。……我々のデザイン料もそれにしてくれればよかった……。

7．余　談

時折 日本から業界団体の方が視察に訪れ我々が様々なアテンドをする機会がある。政府と現地の民間企業が訪問先となる場合が多い。以前、筆者は上海市から日本企業の誘致活動を頼まれた際、商務顧問という肩書きを頂いたこともあり、政府機関については来られる団体の事情にあった市の担当者を招いて講演などをしてもらうのは難しいことではない。

かたや民間企業にはこの試薬メーカーを推薦する。忙しい中、社長も一役買って屈託無く対応してくれる。視察が終わり何か印象に残ったことはと皆に聞くと、口をそろえてこの試薬メーカーの訪問と開発のピソードが良かったという。その中で社長は我々や日本へのお世辞などを絡ませているのかもしれない。実はこの社長、日本が大好きだ。一族を連れて年に一度は訪れている。日本は自然が素晴らしい

日系企業の中国企業訪問

何より空気がいい、といつも褒めまくる。試薬などを扱う医療系だから健康への気遣いは強いのだろう。特に環境についてはすごく気を使っていて家族の生活拠点は既にカナダに移している。市民権も獲得しているから将来は中国から離れるのかもしれない。そういえば、あの頃既に「まもなく中国の大気汚染は大変なことになる」と何度も口にしていたのを思い出す。こういう業界だ。情報はいち早く掴んでいたのだろう。

誰でも祖国の賛辞を聞けば自分が褒められているようで悪い気はしない。自分と出会った中国人経営者たちのほとんどは日本が好きだ。皆、資産家だ。ゆとりがあるのだろう。反日的感情などカケラも感じない。とにかく現地で仕事をしている場合、相手をＡさんＢさんと呼び合うだけで中国人と話しているという気がしない。人と人の通い合いなのだ。

ところで、この試薬会社の社長の口から出るいつもの口癖は「企業は儲けなくてはいけない、経営者は欲張ってはいけない、売り上げの３分の１以上（！？）とってはいけない」ということだ。ちょっと数字がおかしいような気もするがこのあたりがオーナー社長たちの正直な気持ちなのだと思う。なぜかこの人が言うとガツガツした感じに聞こえない。我々としても「分かち合いの精神」をもって頂ければ、どんどん儲けて頂きたいと願うばかりだ。

8．ＤＮＡ分析器の開発

科学実験機器の市場規模が世界にどれだけあるのか自分にはよくわからない。しかし健康、医療、美容、バイオ、食品など社会生活の根幹で日夜研究や分析が行われ、そのための機器開発も活発だ。我々にも分析器や実験機器の依頼は途切れることがない。この世界もデザインは性能機能と同じく重要な要素となっている。

この会社の本社はシンガポールにあり社長一族は華僑だ。経営者は中国人だが正しくは中国企業ではない。ただし 上海には立派なオフィスもあるし近郊には巨大な工場もある。シンガポール本社側でも当然、生産は行っているが工場はインドネシア領のバタム島というところにある。この島までは朝晩の通勤圏内の距離。ちなみにこの島の工員レベルにおける賃金は７分の１ということだ。なお、シンガポールの中間管理職の平均収入は日本とほぼ同水準。DNAの分析装置といってもサイズはそれほどでもない。30センチ四方ほどの小さな箱であり、そこに数十のサンプルが容器内に収められている。蓋の稼動構造を除けば他の製品デザインと比べて特に難しいということは無い。この分析器開発の問題は別なところにあった。開発拠点が世界に散らばって存在するという開発体制の問題だ。生産拠点はアジア地域に集中しているが開発チームはシンガポールの本部、中国、ドイツ、アメリカ、日本と分散している。現代においてビジネスをグローバルに展開するのは当然のことだが開発チームが分散していて良いことは何も無い。

その上に厄介な問題がある。決済すべき社長がいつもどこかに飛び回っていて会議（スカイプ）に出て来ないときが多々あるのだ。そんなときは奥様が臨時で現れる。しかしこの方、話が少しでも難しいことになると「私にはわからない、今、社長に連絡して聞いてみる」となってしまう。トップダウンだから一族以外にこの役割は譲れないのだろう。たまに現れる社長はいつも目の前にパソコン、タブレット、スマートフォンをズラッと並べて、会話のときも大半はそちらを見ながら早口に、しかも英語と中国語を瞬時に切り替えながら話すのには閉口する。

社長はもともと貿易などの営業畑で技術屋ではない。それに加えてコンピューターやネット万能主義でまことにスマートな現代の若手経営者だ。なので、どうもバタ臭い開発の世界にはあまり向いていないらしい。

世界をつないだスカイプ会議と聞けば便利そうだが実は時間差もあってアメリカ人は眠そうだし早口のネイティブ英語はほとんど聞きとれない。そしてドイツ人はいつも話を難しくしてしまう。いつも会議が終わってスカイプが切れると何が決まったのだろうという怪しい心配事がジワっと漂うことになる。

こういう様々な障害だけでない。いつものように

DNA分析器

シンガポール本社の重要な開発メンバーが途中で辞めてしまうという事態もあった。

これらのことが無ければあっという間に終わったであろう今回のプロジェクトだが修正変更の繰り返しばかりが記憶に残ることとなってしまった。

9．時代は忙しい

最近は世界各国をインターネットでつなぎ、互いの顔や図面を見ながら会議ができるようになった。電話も無かった頃から生きている自分がまるで化石のように思えてしまう。このインフラの普及もあって世界戦略などとカッコいいのだが、正直言っていくらＩＴ技術を駆使しても距離感や言葉や考え方の壁を越えるのは相当に困難だ。ましてやモノつくりの世界は現物がそこにあっても見逃すような問題が次々と露呈する。

かたや飛行機を飛ばして世界を飛び回る経営者がいる。経営の根幹に関わることとなれば人間関係の機微を感じ取りながらのコミュニケーションは欠かせないのだろう。実際に会って握手をして近況の話しを交えたり食事でもしながら、じっと相手の素振りを見て投資と未来の利益を素早く計算したりするのだろうか。メールや電話でやり取りをしながらそれを確認するためにまた、行ったり来たりと現代人はますます忙しい。

10．中国の開発から見えたこと

100年という単位で振り返ってみれば 世界のなかで次々とモノを作ってきたのはイギリス アメリカ ドイツ そして日本だろう。その中でも近年ではドイツと日本が頑張って世界をリードしてきたといっていい。これだけ多くの国がありながら なぜこの二つの国がモノつくりに目立つ功績を挙げられたのだろうか。中国に来てこの国の人々とともに開発を繰り返してくると ますますこのことが妙に気になるのだ。今回のシリーズで書いたように開発とは「未来への約束」だと思う。

開発者の手を離れればそのほとんどは見ず知らずの人の手に渡り、それぞれの立場や方法でそのモノを使うことになる。それがどんなに乱暴に扱われても そのモノは機能と性能を要求にしたがって責任を果たさなければならない。そのとき開発者は 生み出したモノの横にいてあげられない。モノの役割を助けることはできない。だから構想、設計、試作、試験の段階でできる限りの心配をして「できる限り良きモノ」を社会に送り出そうと努力する。時に家族に対する心配よりも目の前の設計に人生の時間を捧げたりする。すなわち誰に言われるまでもなく開発者は未来への約束を果たす。人間には自由勝手気ままに振舞いたいという欲望がある。 しかし世の中はそうはいかない。こと開発となると安全 メンテナンス 法規制 時間 コストなどが立ちはだかってそういう生き方の対極を要求する。面倒くさく苦しいことばかりだ。

しかし確かに多くの日本人はこの面倒な仕事をやりぬいてきた。かつてまだパソコンなど何も無い時代にも鉛筆と紙だけで素晴らしい製品をたくさん作り出してきた。こういうことを日本人は黙々とやる資質が確かにある。この資質とは一体何だろう。どこからやってくるのだろう。

次回予告

人間を構成する頭と心と精神と。
行ってよかった中国、振り返る日本。
それでもやっぱりガラパゴス。

（つづく）

●株式会社賀風デザイン

1981年創業。総勢10名の中堅工業デザイン会社。バブル崩壊以降、日本の産業界縮小の影響を考え今後の発展が見込まれる中国上海に2003年進出。数々の困難を乗り越え独自のビジネス手法を確立。現在、現地企業はもとより日系メーカーとも多くのプロジェクトが進行中。

COLUMN

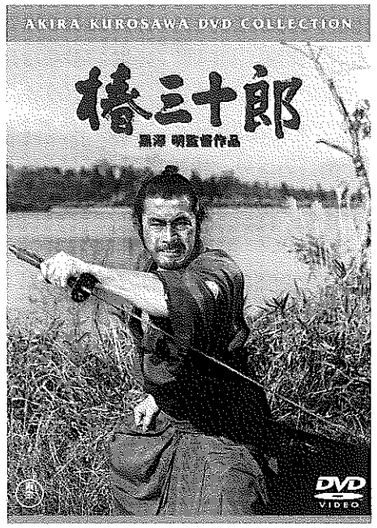
抜き身のカチャカチャ音 ――『椿三十郎』を中心に

大正大学 表現学部 表現文化学科 クリエイティブライティングコース 助教　徳永直彰

侍が刀を抜いて構える。直後、鋭く響く金属音「カチャッ！」――時代劇映画・ドラマでは定番の効果音だ。が、刀身・柄・鍔（つば）・目釘・切羽（せっぱ）などのパーツがガッチリ組み合わさっているのが日本刀の常態なので、実際にこのような音が鳴ることはまずありえない。「日本刀カチャカチャ表現」と私が呼ぶこの効果音について、虚構研究・武術研究双方の観点からあれこれ考えている。おかげで時代劇に刀が出てくると耳を澄ます習慣がついてしまったが、意外なことに、戦後十数年くらいまでの時代劇映画にはこれが出てこない。つまり、比較的新しい虚構表現なのだ。

現時点で私が確認できた最も古い事例は『椿三十郎』（監督：黒澤明、1962年）における三つの描写である。一つ目は、隠密行動中の三十郎に敵役・室戸半兵衛が抜き身を突きつけ、刃を三十郎の首に向ける瞬間、「動くな斬るぞ」という半兵衛の意志と同調してカチャッ！　二つ目は、捕らえられた三十郎の刀を検分する半兵衛が刃を返した瞬間にカチャッ！　三つ目は、怒りにかられた半兵衛が投げつけた三十郎の刀が地面に突き刺さる瞬間にカチャッ！

まず特筆すべきは、いずれのカチャ音も、かすかに金属音を感じさせるBGMの打楽器と混ざり合うように聞こえることだ。特に三つ目のカチャ音は、明らかにBGMとシンクロしている。すなわち、BGMの一部としての効果音あるいは擬音（＝観客にしか聞こえていない音）としても受け取れるような工夫（一種の照れ隠し？）が見てとれる。また、上記三描写の前夜、三十郎が半兵衛の部下二十人を一気に斬り伏せていることを考えると、たとえば目釘が半ば折れるなどしてカチャ音が出た、と解釈することもできる。



作中「抜き身の刀」と評される三十郎

『椿三十郎』【期間限定プライス版】DVD発売中
￥2,500＋税　発売・販売元：東宝

半兵衛のほうには三十郎のような荒仕事の場面がないが、作中で三十郎とともに「抜身の刀」にたとえられる男の刀もまた同様に痛んでいるのだろう、と解釈できないこともない（ちょっと苦しいが……）。つまり、BGM・音響効果の面からも、人物設定・ストーリー展開の面からも、本作における日本刀カチャカチャ表現には現在のものと違い、それなりの「必然性」「妥当性」のようなものが与えられているのである。

『椿三十郎』の前作『用心棒』（監督：黒澤明、1961年）は殺陣の新工夫はむろん、派手な斬撃音でも先駆とされる作品だが、日本刀カチャカチャ表現は見られない。前述のように翌年公開の続編『椿三十郎』がこの表現の起源であることを物語っているが、むしろそれゆえに、『用心棒』には見逃せない描写がある。三十郎と向かい合った敵役の卯之助（演者は『椿三十郎』の半兵衛と同じく仲代達矢）がトレードマークである拳銃を抜き、撃鉄を引き起こして三十郎を脅す――「動くな撃つぞ」という、西部劇に頻出するあの描写だ。当然、撃鉄を引き起こす音が鳴る――カチャッ！　『椿三十郎』で三十郎を脅す半兵衛の刀は、この『用心棒』で三十郎を脅す卯之助の拳銃のバリエーションではなかったろうか？（黒澤時代劇と西部劇の親和性については小川順子『「殺陣」という文化―チャンバラ時代劇映画を探る（中部大学学術叢書）』に詳しい。）

以上、これまでのリサーチをもとに、この興味深い表現の起源に関する仮説を述べた。『椿三十郎』以前の時代劇映画における日本刀カチャカチャ表現の事例をご存じの方は、ご教示をいただけると幸いである。